

[B年]復活日(イースター)(2022年4月17日)

【旧約聖書日課】出エジプト 14章15～22節

15主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出發させなさい。16杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。17しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。18わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」

19イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを行き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、20エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。21モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。22イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分が

キリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】

マルコによる福音書 16章1～18節

1安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。2そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。3彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。5墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。6若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」8婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 14章15～22節

15主はモーセに言われた。「なぜ、私に向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に出発するように告げなさい。16あなたは自分の杖を上げ、海に向かって手を伸ばし、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行ける。17私がエジプト人の心をかたくなにするので、彼らはその後を追って入って来る。そこで、ファラオとその全軍、戦車と騎兵によって私は栄光を現そう。18ファラオとその戦車と騎兵によって私が栄光を現すとき、エジプト人は私が主であることを知るようになる。」

19イスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは移動し、彼らの後ろから進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移動して、彼らの後ろに立ち、20エジプトの軍とイスラエルの軍の間に入った。雲と闇があって夜を照らしたので、一晩中、両軍が接近することはなかった。21モーセが海に向かって手を伸ばすと、主は夜通し強い東風で海を退かせ、乾いた地にした。水が分かれたので、22イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行った。水は彼らのために右と左で壁となった。

ローマの信徒への手紙 6章3～11節

3それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにあずかる洗礼〔バプテスマ〕を受けた私たちは皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。4私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きる〔直訳→歩む〕ためです。5私たちがキリストの死と同じ状態になるとすれば、復活についても同じ状態になるでしょう。6私たちの内の古い人がキリストと共に十

字架につけられたのは、罪の体が無力にされて、私たちがもはや罪の奴隷にならないためであるということ、私たちは知っています。7死んだ者は罪から解放されているからです。8私たちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。

マルコによる福音書 16章1～18節

1安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。2そして、週の初めの日、朝ごく早く、日の出とともに墓に行った。3そして、「誰が墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4ところが、目を上げて見ると、あれほど大きな石がすでに転がしてあった。5墓の中に入ると、白い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、女たちはひどく驚いた。6若者は言った。「驚くことはない。十字架につけられたナザレのイエスを捜しているのだろうが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかる。』」8彼女たちは、墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・4月17日「復活日」の日課主題は「キリストの復活」。「復活日(イースター)」の聖書日課は、「前夜または早朝」および「日中」と注の付けられた二組が設定されている。「降誕日」同様、「復活日」の祝いも、前夜(イブ)から始められる習慣が古くから続いており、前夜の祝いの礼拝は「復活徹夜祭」などと呼ばれ、伝統的な主流教会では現在でも続けられている。伝統的にイースターの祝いの中で行われてきた成人洗礼式は、前夜の「復活徹夜祭」の中に組み込まれてきたが、日中の祝いの中で行われることも少なくない。幼児洗礼の習慣が後退して来た昨今、この習慣が見直されてきている。

・今年の主日聖書日課は、「前夜または早朝」用に設定されたセットから用いる。福音書日課は、「マルコによる福音書」の復活顕現伝承の箇所。旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、エジプトを出発した民がエジプト軍の追撃を逃れて海を渡って行く逸話を物語る箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、洗礼によって与えられる信者のアイデンティティについて教える箇所。

旧約日課(出エジプト 14 章より)

・「出エジプト記」は、正典「律法」の第二に置かれた、「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一巻に位置する。内容は、「モーセの誕生物語」「モーセの召命物語」「十の災い物語」「過越しと出エジプトの物語」「荒野の逸話物語」「シナイ契約伝承」「幕屋建設伝承」によって構成されている。日課箇所は、「過越しと出エジプトの物語」の最後の場面に相当する「葦の海の奇跡」の一部。同じ箇所が主日聖書日課今サイクルの「公現後第1主日」(今年は1月9日)でも設定されているのは、この逸話が「新約」における「洗礼」の予型として解釈されてきたことによる。資料「聖書と祈りの会 220105」を参照。

・19節「御使い(マラーク)」は「使者」の意で、必ずしも天的存在を指す用語ではない。正典「律法」中、「創世記」および「民数記」では用例が多いが、「出エジプト記」中では6例、ほかに「申命記」で1例のみ用いられているが、「申命記」の用例は世俗的用法である(申 2:26「使節」)。「出エジプト記」中では、もっぱら民を導く者としての用法がほとんどで(出 3:2、14:19、23:20,23、32:34、33:2)、これも必ずしも天的な存在を指しているとは言えない。天的神的な性質をうかがわせるのは、出 3:2「炎の中に主の御使いが現れた」の例であるが、このような表現は、日課箇所の例でも見られるように、ある種の比喩あるいは象徴表現であり、必ずしも天的実体を示しているわけではないだろう。おそらく、「出エジプト記」中では、「民の導き手」としてのモーセの役割を指し示すものとして「マラーク(御使い)」が用いられていると考えられる。

使徒書日課(ローマ 6 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマ教会に宛てて記した書簡文書。パウロは、自らのローマ訪問計画を事前に伝えるためにこの書簡を記し、また合わせてローマ訪問後に計画しているエスペニア宣教への協力を要請するために、この書簡を用いている。ローマの教会は、パウロらを派遣してきたアンティオキア教会とは異なる系譜で創設発展していたと考えられるが、おそらくその経緯は類似したものであったと推認される(「使徒言行録」11~13章のアンティオキア教会創設発展の物語を参照)。

・当時のローマ市には多くのユダヤ人が居住しており、一説には人口の約1割がユダヤ人であったとも言われる。これは、前2世紀に共和政ローマが東方進出しセレウコス朝シリアやプトレマイオス朝エジプトを支配下に置いていく際に、ユダヤ人社会と協力関係を築いたという歴史的経緯に基づいて、前1世紀のユリウス・カエサル以降、帝政時代に移行してからもユダヤ人社会に対する特権的な保護政策が取られたことによる。

・パウロが書簡を送った当時のローマ教会は、アンティオキア教会同様、すでにユダヤ人と異邦人の混成教会として形成されていたと考えられる。とは言え、その場合の異邦人の多くは、アンティオキア教会の場合と同様、もともとユダヤ教に関心を持って会堂礼拝に参加するようになって「神を畏れる者」と呼ばれるようになっていた異邦人や、さらに割礼を受けてユダヤ人としての生活習慣(律法の戒律)を遵守する誓約をした「改宗者」と呼ばれる異邦人から加わった者たちだったと推認される。パウロは、キリスト信仰に基づき、割礼を施すなどの要件を求めずに信仰共同体に異邦人を受け入れることを主張しているが、それは、「神を畏れる者」と呼ばれる異邦人をそのまま共同体の十全な構成員として認めるということである。実際、パウロの宣教活動で、まったくユダヤ会堂と接点を持たない異邦人がキリスト信仰を受け入れ、洗礼を受けて共同体に加わったとして伝えられる事例はほとんどない。

・3節「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた…、またその死にあずかるために洗礼を受けた」の直訳は、「キリスト・イエスへと洗礼を授けられ…、彼の死へと洗礼を授けられた」。また、4節「洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」の直訳は、「洗礼によって彼と共に死へと葬られた」。つまり、パウロは、「キリスト」と「死」を同格的に扱う表現をここで用いている。このような表現によって、パウロは、「洗礼」を、キリストへと方向づけられる事柄として示すと共に、キリストと共に「死」へと方向づけられる事柄として明確に示しているのであろう。

・5節の直訳は、「わたしたちが彼の死の似姿(ホモイオーマ=類型)を共有する者となっているのであれば、その復活の(似姿を共有する者)ともなるでしょう」。

福音書日課(マルコ 16 章より)

・日課箇所は、主の復活顕現伝承の中でも四福音書に共通する「空の墓における復活の告知」の逸話。詳細の描き方は福音書によって異なるが、いずれもその最初の目撃証言者が婦人の弟子たちであり、中でもマグダラのマリアに焦点が当てられていることが重要である。つまり、四福音書は共通して、「復活顕現」の最初の証言者としてこの女性を無視できないのであるが、その証言を確実なものとして認めるかどうかは、各福音書によって理解に差がある。

・「マルコ福音書」の確実な写本本文は、この場面が終わっており、9 節以下に印刷されている部分は、時代が下った写本に基づく付加部分である。元来の「マルコ福音書」が、この 8 節で末尾となっていたのか、本来はこれ以後の部分があったのに何らかの事故で欠落して伝えられることになったのかは、まったく分かっていない。9 節以下に付加された部分は、基本的に他の福音書の伝える伝承を要約したものであるため、聖書解釈上は、「マルコ福音書」本文を 8 節までで終結したもののみならず扱うことが一般的である。

・「マグダラのマリア」は、「ルカ福音書」では早い段階で登場させられるが(ルカ 8:2)、他の福音書ではいずれも、主イエスの十字架刑に立ち会った婦人たちの中に加えられる所から登場し、そのまま週の初めの日の朝に墓を訪れる婦人たちの中に数えられて描かれる。四福音書以外では知られていない女弟子であるが、主イエスの母マリアと共に初代エルサレム教会で重要な役割を果たした人物と推認される。

・空の墓で主イエスの復活を告げる者は、「白い長い衣を着た若者」として描写されるが、他の福音書のようにこれを「天使(アンゲロス)」とは表現していない(「ルカ」は、空の墓の場面では「天使」と呼ばないが、続く「エマオへの途上の弟子たち」の逸話で「天使」と証言させている)。「マルコ」は、ペトロの証言を基にしてまとめられているとも考えられるが(7 節にもそう考えられる表現「弟子たちとペトロに」がある)、ペトロの知る特定の「若者(ネアニスコス)」(14:51 にも登場させられている)を示唆しているのかもしれない。

来週の誕生日 (4 月 17 日～23 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-325 番「キリスト・イエスは」(= I 148「すくいぬめしは」)は、原詞が 14 世紀のラテン語聖歌で、1708 年発行英語讃美歌集『ダビデの堅琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讃美歌として歌われてきた。

・21-331 番「主はよみがえられた」は、テゼ共同体の讃美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ(ブラザー・ロジェ)が、1940 年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始ま

った祈りの共同体(観想修道会に近い)。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975 年以降、テゼ共同体のために多くの讃美を作曲した。

・21-69 番「神はそのひとり子を」(☐20 番)は、現代オーストラリアの讃美歌作家ロビン・マンの作詞作曲で、アジアキリスト教協議会編纂の「*Sound the Bamboo: CCA Hymnal 1990*」所収のもの。ルター派の神学校で神学と教会音楽を修めている。

・21-326 番「地よ声たかく」(= I 154)は、7~8 世紀のギリシア正教会で活躍した代表的な神学者「ダマスコのイオアン(ヨハネ)」の作詞したカノン形式の詩によるギリシア語聖歌。曲は、19 世紀英国の教会音楽家スマートの作曲。

21-325「キリスト・イエスは」**Surrexit Christus hodie****(English Translation)**

1. Christ the Lord is ris'n today, Alleluia! / Sons of men and angels say, Alleluia! / Raise your joys and triumphs high, Alleluia! / Sing, ye heav'ns, and earth reply, Alleluia!
 2. Love's redeeming work is done, Alleluia! / Fought the fight, the vict'ry won, Alleluia! / Jesus' agony is o'er, Alleluia! / Darkness veils the earth no more, Alleluia!
 3. Lives again our glorious King, Alleluia! / Where, O death, is now thy sting? Alleluia! / Once he died our souls to save, Alleluia! / Where thy victory, O grave? Alleluia!
- (*Hymns of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints #200*)

21-331「主はよみがえられた」**Surrexit Dominus vere**

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia, / Surrexit / Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

21-69「神はそのひとり子を」**Father welcome all his children**

Refrain: Father welcomes all his children / to his family through his Son. / Father giving his salvation, / life forever has been won.

1. Little children, come to me, / for my kingdom is of these; / life and love I have to give, / mercy for your sin.
2. In the water, in the word, / in his promise be assured: / those who are baptised and believe / shall be born again.
3. Let us daily die to sin, / let us daily rise with him — / walk in the love of Christ our Lord, / live in the peace of God.

21-326「地よ、声たかく」**Αναστασεως ημερα****English translation**

1. The day of resurrection! / Earth, tell it out abroad; / the passover of gladness, / the passover of God. / From death to life eternal, / from earth unto the sky, / our Christ hath brought us over, / with hymns of victory.
 2. Our hearts be pure from evil, / that we may see aright / the Lord in rays eternal / of resurrection light; / and listening to his accents, / may hear, so calm and plain, / his own "All hail!" and, hearing, / may raise the victor strain.
 3. Now let the heavens be joyful! / Let earth the song begin! / Let the round world keep triumph, / and all that is therein! / Let all things seen and unseen / their notes in gladness blend, / for Christ the Lord hath risen, / our joy that hath no end.
- (*United Methodist Hymnal, 1989*)